平安京跡発掘調査概報

平成５年度

京　都　市　文　化　観　光　局

序

京都は，恵まれた自然環境の中で幾多の歳月と歴史を積み重ねて，今年建都1200年という輝かしい節目を迎えました。

平安京の造営以来，常に日本文化の先導的な役割を果たすべく，限り無い創造を続けてまいりました先人の足跡を示す多くの文化遺産は，時代の変貌により今は地上から姿を消して，埋蔵文化財として地中に深く眠っています。

しかし，この貴重な埋蔵文化財も最近の著しい都市の開発に伴い，重大な危機を迎えようとしています。

私達の先人が残した，かけがえのない価値を持った埋蔵文化財を，できるだけ保存して現在の生活の中に活用し，後世の人に伝えることが，現代に生きている私達に課せられた大切な責務であると考えています。

本書は，京都市が平成５年度に文化庁の国庫補助を得て実施した，埋蔵文化財調査の概要報告書であります。

立会調査，発掘調査につきましては，本市が㈶京都市埋蔵文化財研究所に委託したものであり，試掘調査は京都市埋蔵文化財調査センターが実施したものであります。

終わりに，発掘調査にご協力いただいた市民の方々及びご指導・ご助言をいただいた関係者の方々に心から感謝いたしますとともに，本報告書が少しでも京都の歴史を知るための資料として皆様のお役にたてれば幸いと存じます。

平成６年３月

京都市文化観光局

例　　言

1　本書は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が京都市文化観光局から委託を受けて実施した、文化庁国庫補助による平成５年度発掘調査の概要報告である。

2　調査地点は、京都市上京区丸太町通智恵光院西入中務町933番地であり、平安宮中務省跡に推定される。

3　発掘調査は高橋　潔・鎌田泰知が担当し、必要に応じて平方幸雄・高　正龍・能芝妙子がこれを補佐した。

4　写真撮影は遺構の一部を除き、村井伸也・幸明綾子が担当した。

5　測量基準点は、京都市遺跡発掘調査基準点を使用し、本調査における測量基準点の設置は辻　純一・宮原健吾が行った。本書中で使用した方位および座標の数値は平面直角座標系Ⅵによる。座標の数値はｍ単位である。また、標高はＴ．Ｐ．（東京湾平均海面高度）による。

6　本書で用いた土壌色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に準じた。

7　本書で使用した地図は、京都市長の承認を得て同市発行の2500分の１の都市計画基本図「聚楽廻」を複製し調整したものである。

8　整理作業および本書の作成作業は鎌田・法邑真理子・能芝が補佐した。また、遺物の復元作業は多田清三・田中利津子・出水みゆき・中村享子・村上　勉が担当した。

9　遺構名の記述に際しては、以下の記号を用いた。

　Ｐ：柱穴、ＳＤ：溝、ＳＫ：土壙

10　本書の執筆および編集は、高橋が担当した。

本 文 目 次

平安宮中務省

Ⅰ 調査経過 …… 1
Ⅱ 遺　　構 …… 5
Ⅲ 遺　　物 …… 7
　1 土器類 …… 7
　2 瓦　類 …… 9
Ⅳ ま と め …… 10
《参考文献》 …… 11

図 版 目 次

図版一　遺跡　1　近世以降遺構面全景（北から）
2　ＳＤ46上層瓦検出状況（北から）
図版二　遺跡　1　ＳＤ46上層瓦検出状況細部（北西から）
2　ＳＤ46下層土器群検出状況（北から）
図版三　遺跡　平安時代遺構面全景（北から）
図版四　遺物　土器
図版五　遺物　軒丸瓦・軒平瓦
図版六　遺物　軒丸瓦・軒平瓦拓影・実測図（１：３）

挿 図 目 次

図１　調査位置図（１：2500）……1
図２　中務省跡主要遺構位置図（１：1000）……2
図３　遺構実測図（１：100）……4
図４　Ｐ31礎石検出状況（西から）……5
図５　ＳＤ46南北セクション断面図（１：40）……6
図６　ＳＤ46出土土器実測図（１：４）……7
図７　ＳＫ47出土土器実測図（１：４）……8

表 目 次

表１　中務省跡既往発掘調査一覧……3

Ⅰ　調査経過

調査地は、二条城の北西、丸太町通と南行する美福通のT字交差点の南西角に位置する。当地に住宅兼事務所の新設が計画されたため、試掘調査を京都市埋蔵文化財調査センターが実施した。試掘調査では、3箇所のトレンチが設定され、現代撹乱が多いものの、地表下約30～40cmにおいて平安時代の瓦を包含する土層が確認された。この結果を受け、建築工事に先立って発掘調査を実施することになった。

本調査地一帯は、緩やかに南西に傾斜する鴨川西岸の扇状地上に立地し、黄褐色系の粘土質の安定した地山が拡がる。平安時代の平安宮中務省跡に推定されており、また弥生時代後期から奈良時代にかけての集落遺跡である聚楽遺跡の推定範囲内にもあたっている。この一帯の地山は、通称聚楽土といわれ、陶土に適することから近世以降大規模に土取りが行われたために、かなり広範囲にわたって撹乱されていることが多い。中務省周辺では、

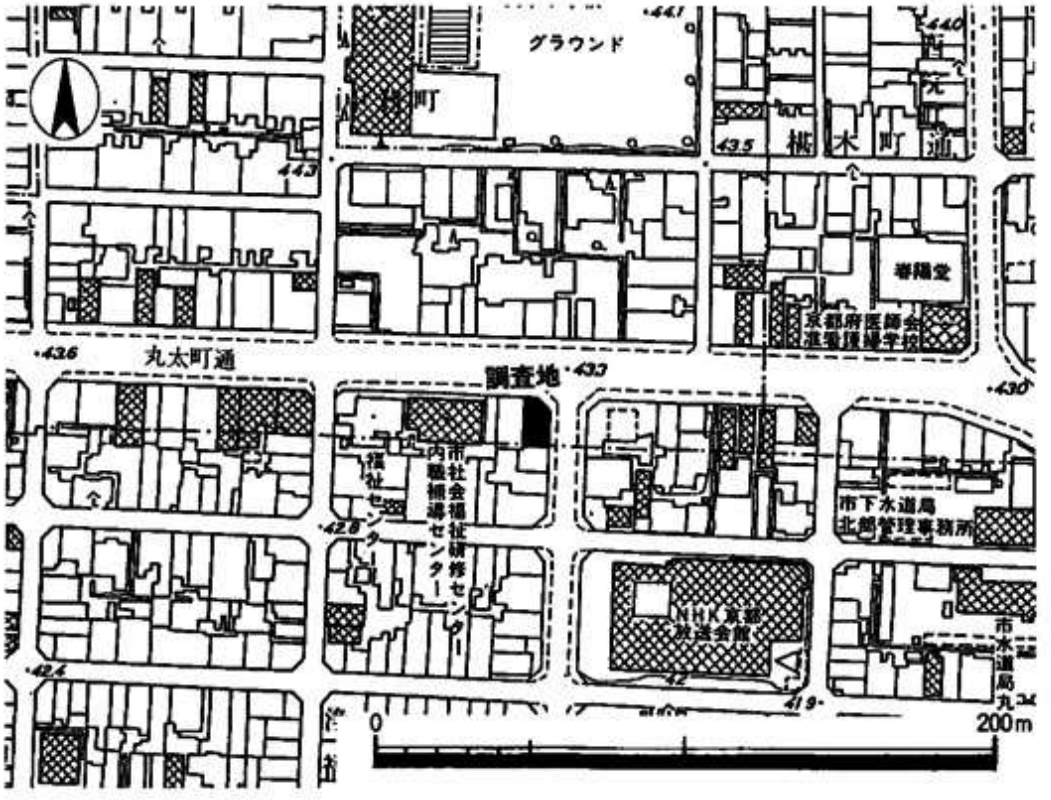


図1　調査位置図

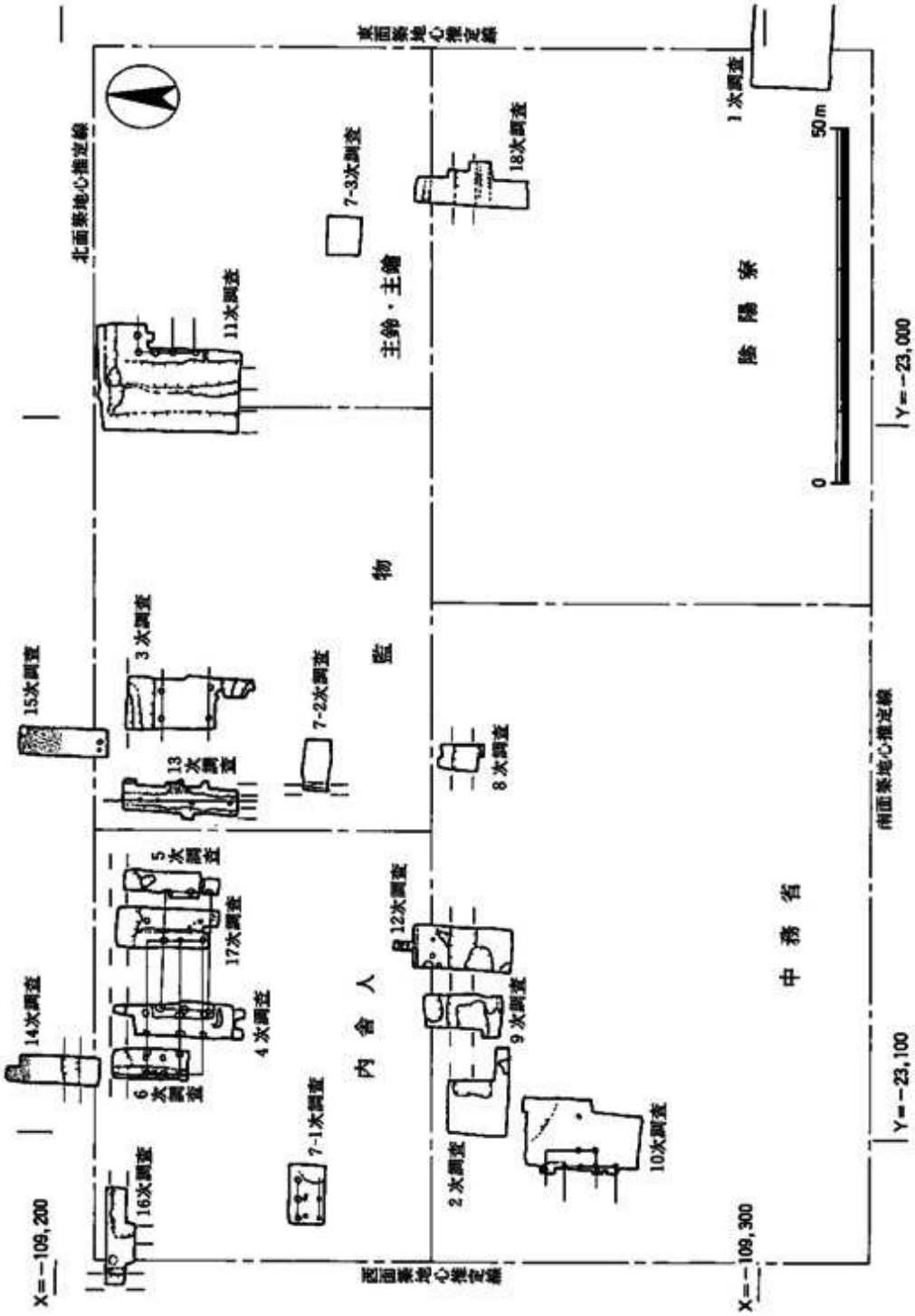


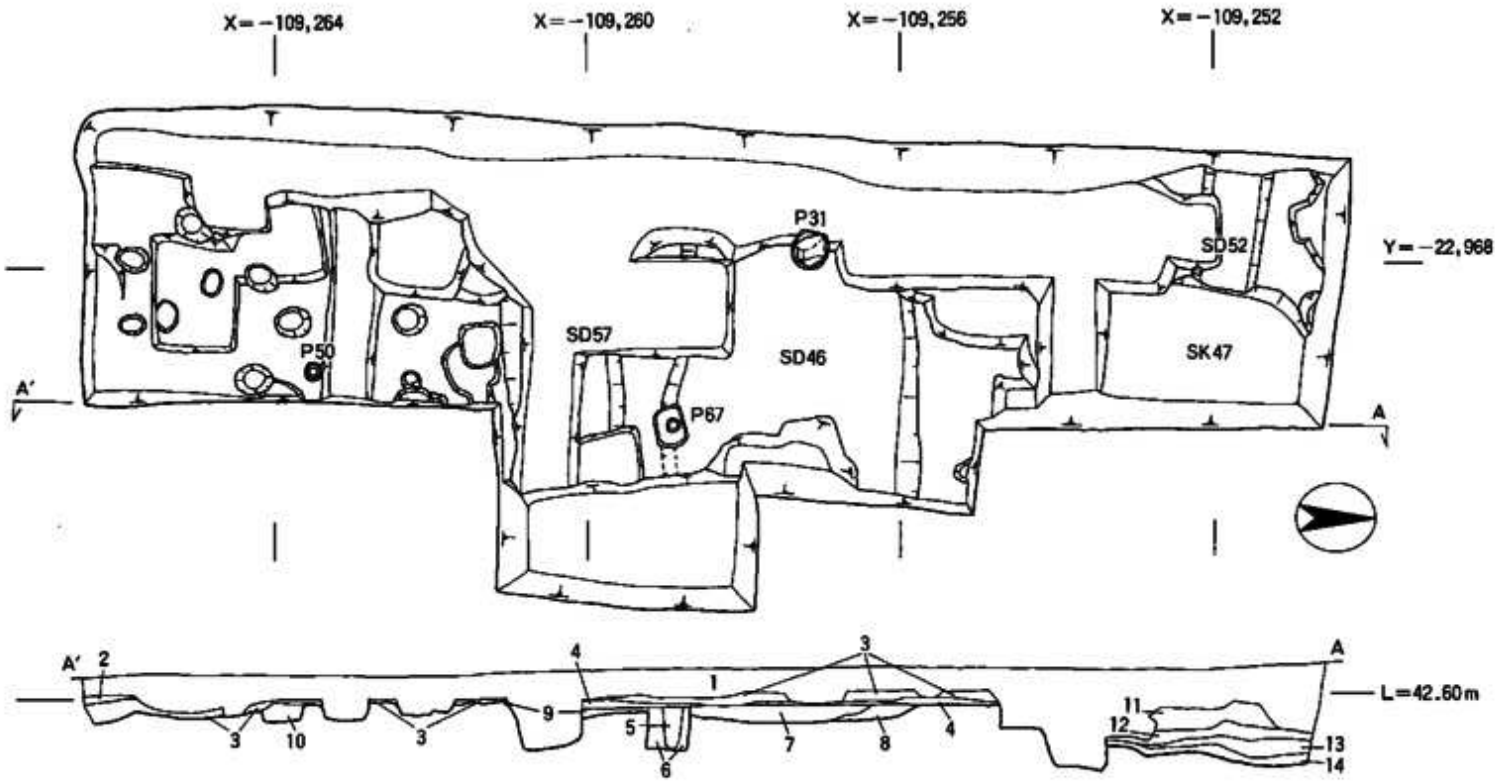
図2　中務省跡主要遺構位置図

次数	年度	主要遺構	主要遺物	時期	調査主体	面積	文献
1	1964	南北溝(東面築地溝？)	軒瓦	前～後期	㈶古代学協会 京都府教育委員会	176㎡	1
2	1978	土壙(東西溝？)	一括土器、硯	前期	㈶京都市埋蔵文化財研究所	65㎡	2
3	1978	北面築地内溝・区画溝・東西棟	軒瓦・文字瓦	前～中期	㈶京都市埋蔵文化財研究所	100㎡	3
4	1979	北面築地内溝・東西棟掘立柱建物・東西棟礎石建物(基壇)	軒瓦	前～後期	㈶京都市埋蔵文化財研究所	50㎡	4
5	1980	北面築地内溝・東西棟礎石建物(基壇)・土壙(古墳後期：土壙)	軒瓦、墨書土器(「内舎人」)	前期	㈶京都市埋蔵文化財研究所	35㎡	
6	1980	北面築地内溝・南北区画溝・東西棟掘立柱建物	軒瓦・文字瓦・緑釉瓦、緑釉火舎、墨書土器(「□省」)	前期	㈶京都市埋蔵文化財研究所	40㎡	5
7	1981	7-1：掘立柱建物・瓦溜 7-2：南北溝(古墳後期：竪穴住居址)	軒瓦・緑釉瓦	前～後期	㈶京都市埋蔵文化財研究所	90㎡	
8	1982	東西区画溝	瓦	平安時代	㈶京都市埋蔵文化財研究所	20㎡	6
9	1986	東西区画溝・土壙	軒瓦・文字瓦、硯	前期	㈶京都市埋蔵文化財研究所	50㎡	7
10	1989	掘立柱建物・土壙・瓦溜	軒瓦・文字瓦、一括土器、緑釉火舎	前～後期	㈶京都市埋蔵文化財研究所	144㎡	8
11	1989	北面築地内溝・南北築地および両側溝・東西棟掘立柱建物(古墳後期：竪穴住居址)	軒瓦・文字瓦、墨書土器、緑釉火舎、人面高杯、硯	前～後期	㈶京都市埋蔵文化財研究所	250㎡	
12	1989	東西区画溝・柱穴・瓦溜・土壙	軒瓦・文字瓦・鴟尾・緑釉瓦	前～後期	㈶京都市埋蔵文化財研究所	87㎡	9
13	1990	南北築地および両側溝・暗渠・北面築地内溝・柱穴・瓦溜・土壙	軒瓦・文字瓦	前～後期	㈶京都市埋蔵文化財研究所	62㎡	10
14	1991	北面築地外溝・路面(古墳後期：土壙)	軒瓦	前～後期	㈶京都市埋蔵文化財研究所	44㎡	11
15	1991	北面築地外溝・路面(古墳後期：土壙・溝)	軒瓦	前～後期	㈶京都市埋蔵文化財研究所	48㎡	12
16	1991	北面築地および内溝・西面築地および内外溝・暗渠・柱穴(穴門？)	軒瓦、硯	前期	㈶京都市埋蔵文化財研究所	43㎡	13
17	1992	北面築地内溝・東西棟掘立柱建物・東西棟礎石建物・瓦溜(古墳後期：竪穴住居址・柱例・土壙)	軒瓦、墨書土器(「監」)	前～中期	㈶京都市埋蔵文化財研究所	65㎡	14
18	1993	東西区画溝・土壙(本報告)	軒瓦	前期	㈶京都市埋蔵文化財研究所	66㎡	

表1　中務省跡既往発掘調査一覧

これまでの周辺の調査により土取りからは免れ比較的遺構が良好に遺存していることがわかっている。

平安宮中務省跡に関しては、これまでに17次にわたる発掘調査と13件の試掘・立会調査などが行なわれている。それらの調査では、平安時代の建物・築地・溝などが検出され、中務省の四至についてもほぼ確定している。また、古墳時代の竪穴住居址や掘立柱建物・溝なども確認されている。中務省といわれる区域には、大きく南北を2分し、さらに北側を3分して東から主鈴・主鑰、監物、内舎人とそれぞれ呼ばれ、また南を2分して東に陰陽寮、西に中務省があったとされている。[1)] 18次調査にあたる本調査地は、これまでの成果から想定される中務省の復原図上では、中務省の南北のほぼ中央、東端に近く、推定では主鈴・主鑰と陰陽寮を跨ぐ位置にあたり、これらを画する東西方向の築地や溝が検出でき



1 現代盛土および攪乱
2 10YR1/4褐灰色泥砂
3 10YR3/4暗褐色泥砂
4 7.5YR3/4暗褐色粘質土 ┤整地層
5 10YR3/4暗褐色砂泥
6 7.5YR4/3褐色砂泥 ┤P67
7 SD46上層
8 SD46下層 ┤図5参照
9 10YR4/4褐色砂泥－SD57
10 7.5YR3/4暗褐色砂泥－P61
11 10YR5/8黄褐色砂泥＋7.5YR4/4褐色砂泥
12 10YR5/8黄褐色砂泥＋7.5YR4/3褐色砂泥
13 7.5YR褐色砂泥
14 10YR5/8黄褐色砂泥＋7.5YR4/3褐色砂泥
(11～14はSK47埋土)

0 5m

図3 遺構実測図

るものと考えられた。[2]

調査は、試掘調査の結果を踏まえ、南北に細長い66㎡の調査区を設定し、機械掘削により現代盛土および近世以降の整地層を除去して開始した。機械掘削の結果、当初予想したよりも現代の攪乱が多く存在し、島状に残った箇所の調査を行うといった状況であった。近世以降の整地層の下面は地山面となり、平安時代の遺構は地山に切り込む状態で検出した。検出した遺構は、柱穴・土壙・溝などである。完掘後、遺構実測・写真撮影を行い調査を終了した。なお、調査中の排土はすべて敷地外へ搬出した。

II 遺　　構

最も良好な状態の箇所で観察した層序は、地表下約0.30mまでが現代盛土となっており、以下厚さ0.05～0.10mの近世以降の整地層が認められた。整地層以下は基本的に黄褐色～褐色砂泥（地山）となる。

検出した遺構には、近世以降のものと平安時代のものとがある。

近世以降の遺構には柱穴・溝・土壙などがあり、整地層の上面で確認したものと整地層除去後に地山面で確認したものとがあるが、多くは整地層の上面で検出した。

平安時代の遺構は、すべて地山面で検出した。柱穴・溝・土壙などがあるが、近世以降の遺構や現代攪乱により削り取られ、遺存状況は良好ではなかった。主な遺構の概要を以下に述べる。

P31（図4）　径0.50mの円形掘形をもち、検出面からの深さ0.50mの柱穴である。ＳＤ46が埋まった段階で掘り込まれている。底面には径0.40mの扁平な礎石を据えている。遺物は、ＳＤ46を掘り込んだ際に混入したと考えられる瓦小片が少量出土している。

図4　P31礎石検出状況（西から）

ＳＤ46（図5）　幅3.40m、検出面からの深さ0.25mの東西方向の溝と考えられ、東西約３m分を検出した。埋土は瓦片を多量に包含する上層と比較的瓦を含まない下層に大きく分けることができる。一旦埋まった溝（下層）を約１m南に掘り直し、溝（上層）の廃棄段階で多量の瓦を投棄して埋めたものと

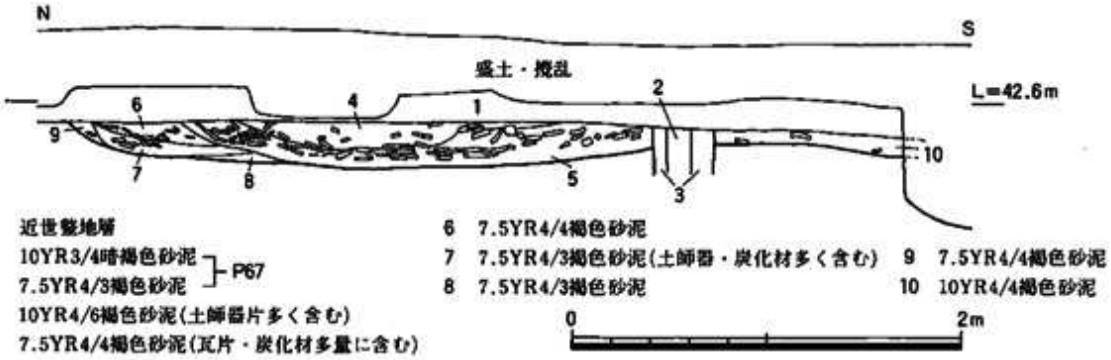


図5　SD46南北セクション断面図（4・5：SD46上層，6～9：同下層）

考えられる。下層が確認できたのは、溝の北肩に沿って約1mの範囲であり、ある程度溝が埋まった段階で炭化材とともにほぼ完形に近い土師器椀や緑釉陶器椀などを投棄している状態が認められた（図版二―2）。上層には、炭化材とともに多量の瓦類が投棄されている（図版二―1）。瓦類は細かく破損しており、完形に復元できるものはなかった。上層と下層から出土した遺物をみる限り、それほど大きな時期差はないものと考えている。また、溝内からは細かく破砕された凝灰岩が少量出土している。

ＳＫ47　検出面からの深さ0.75mの大型の土壙で、東西1.50m、南北2.60mを検出した。南は攪乱に削り取られ、北と東は調査区外にのびるため、西肩を確認したに留まり全貌は明らかにし得なかった。土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦などが出土したが、いずれも小片であった。

P50　径0.20～0.25mの楕円形の小型の柱穴である。柱痕跡は径0.15mの円形を呈し、周囲には根固めのための石や瓦を入れている。出土した遺物は、根固めに用いられた須恵質の重圏文軒平瓦のみであった。

ＳＤ52　調査区の北端で検出した幅0.80m、検出面からの深さ0.20mの断面U字状の東西方向の溝である。東はＳＫ47に切られ、西は調査区外へのびる。遺物は、土師器・須恵器・瓦が少量出土した。

ＳＤ57　幅1.50mの東西方向の溝と考えられ、ＳＤ46の南肩から約0.50m南で平行して検出した。検出面からの深さ0.15mと浅く、攪乱で寸断されるが約3m分を検出した。この溝は、ＳＤ46上層とともに埋められている。出土遺物は少なく、土師器・須恵器・瓦などが出土した。

P67　東西0.55m、南北0.40m、検出面からの深さ0.50mの方形掘形の柱穴である。こ

れも、ＳＤ46が埋まったのちに掘り込まれている。柱痕跡は径0.25ｍの円形で、掘形底面におよぶ。遺物は混入と考えられる瓦小片のほか、土師器小片が出土した。

また、上記の遺構のほかに調査区南半には、地山に切り込むピットを10基確認している。これらは、いずれも暗褐色砂泥の埋土であるが、遺物が全く出土せず、時期を確認できなかった。

Ⅲ 遺　　物

遺物は、遺物整理箱で73箱出土した。その大半は瓦類であり、土器類は少量であった。また、遺物の多くはＳＤ46から出土している。以下、主な土器類と瓦類について述べる。

1 土 器 類

ＳＤ46出土土器（図６、図版四）　ＳＤ46からは、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器などが出土している。上層からは多数の瓦片に混じって出土しているが、その大半は完形に復元できない微細片ばかりである。下層からは前述したようにある程度溝が埋まった段

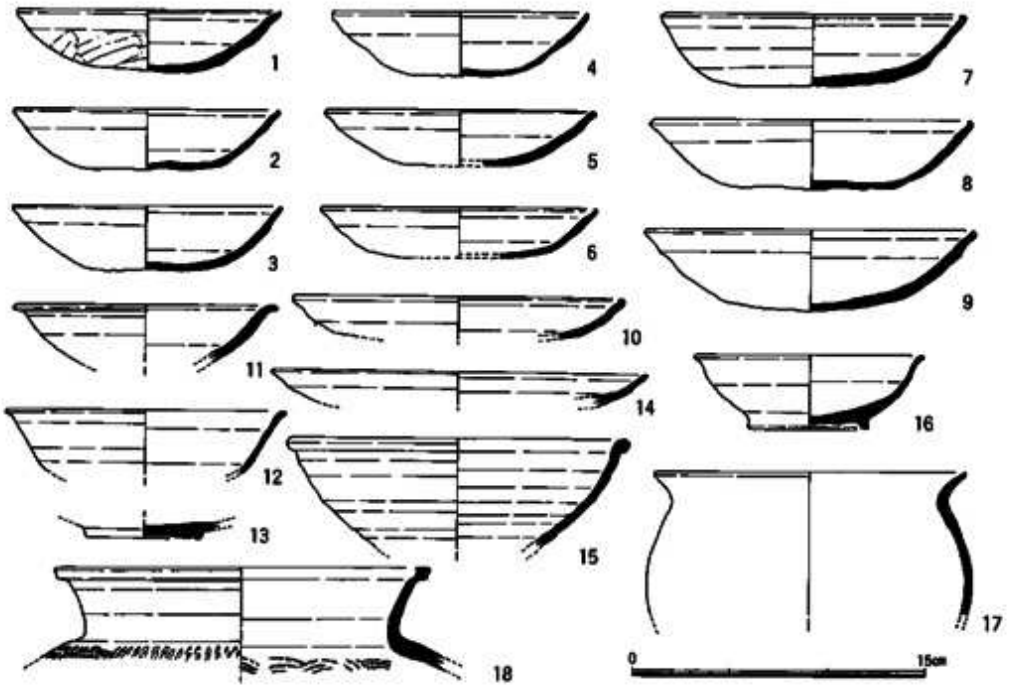


図６　SD46出土土器実測図（１～10・17：土師器，11～13：緑釉陶器，14～16・18：須恵器）

階で投棄されたと考えられる完形に近い土器群がある。

下層の投棄されたと考えられる土器には、土師器杯（1～3・5・7～9）・皿（10）、緑釉陶器椀（11）、須恵器甕（18）がある。土師器杯には、口径13.4～14.0cm、器高3.0～3.5cmの小型（1～3・5）と、口径15.2～17.0cm、器高3.6～4.2cmの大型（7～9）がある。口縁端部形態には、丸くおさめるもの、ややつまみ上げるもの、内厚するものがある。調整手法は、いずれも口縁部上端内外面には強いヨコナデを施しており、外面口縁部中位から底部にはヘラケズリを施すもの（1・3）と指頭圧痕を残すもの（2・5・7～9）がある。土師器皿（10）は、口径17.0cm、器高2.1cmで、口縁端部を内厚させる。緑釉陶器椀（11）は口径13.6cmで、内弯気味に立ち上がる体部から外に開く口縁部をもち、底部には高台が付くと思われる。胎土は軟質で白色を呈する。須恵器甕（18）は、口縁端部に平坦面をもち、体部外面には平行タタキを施す。口径19.4cm。

上層から出土した土器には、土師器杯（4・6）・甕（17）、緑釉陶器椀（12）・底部（13）、須恵器椀（16）・皿（14）がある。土師器杯には、口径13.2cm、器高3.3cmのもの（4）と口径14.2cm、器高2.6cmのもの（6）がある。いずれも口縁部上端に強いヨコナデを施し、外面口縁部中位以下には指頭圧痕をのこす。土師器甕（17）は、体部から外反する口縁部に、ややつまみ上げ気味の口縁端部をもつ。器面が荒れており、調整は不明である。口径16.0cm。緑釉陶器椀（12）は、上層のものより深い体部をもち、胎土は堅緻な須恵質のものである。口径14.4cm。緑釉陶器底部（13）は、軟質な白色の胎土で、ケズリ出し高台である。底面には、糸切り痕が残る。須恵器椀（16）は、内弯気味に立ち上がる体部と外反する口縁部からなり、ケズリ出し高台をもつ。口径11.9cm、器高3.8cm。須恵器皿（14）は、内弯気味に開く口縁部に、丸くおさめる口縁端部をもつ。口径19.4cm。

ＳＫ47出土土器（図７、図版四）

ＳＫ47からは、土師器・須恵器・緑釉陶器などが出土している。しかし、いずれも小片であり、図示できたのは須恵器甕１点（19）に過ぎない。体部から外反して短く立ち上がる口縁部に、外傾面をもつ端部が付く。口縁部は下半をタタキ出して立ち上げたのち、ヨコナデを施す。体部外面は平行タタキを施す。口径18.0cm。

図７　SK47出土土器実測図

2　瓦　　類（図版五・六）

瓦類は、ほとんどの遺構や攪乱から多少なりとも出土しているが、その大半はＳＤ46上層から出土した。他の遺構や整地層・攪乱などから出土した瓦類の多くは、ＳＤ46に廃棄された瓦が混入したと考えられる。出土した瓦類には、丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦があり、いずれも細かく破損しており、また２次焼成を受けたかのように軟質でかなり摩滅しているものが多いため、完形に復元できるものは全くなかった。平瓦の破片が最も多く、丸瓦がこれに次ぎ、軒丸瓦・軒平瓦はごく少量であった。平瓦は凸面に縄叩き目をそのまま残すものが多く、凹面には布目を残す。丸瓦は凸面には基本的に縄叩きを施したのち平滑に仕上げ、凹面には布目を残す。凸面に格子叩き目を残すものも若干ある。緑釉瓦は１点も出土していない。図示した軒丸瓦・軒平瓦は、(25) が攪乱、(26) がＰ50、(29・32) がＳＤ57からそれぞれ出土しており、それら以外はすべてＳＤ46から出土している。

軒丸瓦　(20) は重圏文軒丸瓦である。焼成が軟質のため、かなり摩滅している。精良な胎土で、にぶい黄橙色を呈する。(21) は大きな複弁に撥形の弁間文を配する蓮華文軒丸瓦で四弁に復元できる。焼成は軟質、にぶい黄橙色を呈する。(22) は瓦当面の摩滅が著しいため意匠は不明であるが、複弁蓮華文の軒丸瓦と考えられる。比較的大粒の珠文を配する。焼成軟質、胎土は精良で灰白色を呈する。(23) は単弁蓮華文軒丸瓦で花弁をやや細長く作っており、十六弁に復元でき、長岡宮No.54型式[3]と考えられる。焼成は軟質、胎土にはやや砂粒を含み灰黄色を呈する。(24) は外面黒灰色を呈する軟質のもので、比較的幅広の周縁に大粒の珠文を密に配する。(25) は単弁蓮華文軒丸瓦と考えられる。焼成は軟質、胎土には砂粒はほとんど含まず、黒灰色を呈する。

軒平瓦　(26) は重圏文軒平瓦である。焼成は堅緻で数少ない須恵質の焼き上がりのもので、灰色を呈する。Ｐ50の柱の根固めとして用いられていた。(27) は均整唐草文軒平瓦で、大極殿跡や西賀茂角社瓦窯跡などの出土瓦[4]に同文のものがみられる。比較的大粒の珠文を配する。焼成は比較的堅緻で、胎土に砂粒を含み灰黄褐色を呈する。平瓦部凸面に平行条線叩きを残す。(28) は均整唐草文軒平瓦で、小粒の珠文が密に配される。民部省跡や中務省跡などの出土瓦[5]に同文のものがあり、平城宮6721型式と考えられる。胎土には砂粒を含み、やや軟質で灰黄褐色を呈する。平瓦部凸部には朱線が残る。(29) は唐草文軒平瓦と考えられる。比較的大粒の珠文を疎に配する。軟質で砂粒を含み、灰白色を呈する。(30) は均整唐草文軒平瓦で、大粒の珠文を配する。太政官跡や角社瓦窯跡などの出土瓦[6]に同文

がみられる。軟質で砂粒を含み黄灰色を呈する。(31) は均整唐草文軒平瓦で、比較的小粒の珠文を配する。同文の瓦が豊楽院跡[7]などから出土しており、本調査ではＳＤ57から出土している。砂粒を多く含み、軟質で黄灰色を呈する。(32) は均整唐草文軒平瓦で、(31) と同文である。対向Ｃ字形の中心飾りを持ち、珠文は比較的小粒のものを配する砂粒を多く含み、軟質で黄灰色を呈する。

Ⅳ まとめ

本調査では、平安時代前期に掘削され、まもなく埋められたと考えられる東西方向の溝ＳＤ46を検出した。この溝は、これまでの調査成果に照らし合わせて考えると８次調査のＳＤ１[8]、９次調査のＳＸ13[9]、12次調査のＳＤ14[10]の東延長上にあたり、中務省域内の南北を画する溝の一部になる可能性が高い。しかし、これまでの成果をみる限り、いずれも平安時代前期の間には大量の破損瓦をもって埋められてしまい、そののち再び掘り直されることはなかったようである。また、ＳＤ52・57もＳＤ46とほぼ平行する東西溝であることから何らかの区画に伴う溝である可能性が考えられる。

本調査地では、８次調査地から約75ｍ離れているものの、東延長上にある東西方向の区画溝を検出した。しかし、予想に反して現代の攪乱が多く、調査前に想定された平安時代の築地跡や建物跡、また聚楽遺跡に関わる遺構や遺物については今回の調査では検出できなかった。

注１　陽明文庫蔵　宮城図

注２　辻　裕司「平安宮中務省跡」『平安京歴史研究』杉山信三先生米寿記念論集刊行会　1993年
　　辻氏は、この論文で本調査も含め既往の中務省跡の調査を文献資料とともに詳細に検討され、中務省跡の復原を試みられている。

注３　平安博物館編『平安京古瓦図録』 1977年

注４　注３文献

注５　注３文献および参考文献10

注６　注３文献

注７　鈴木久男「平安宮豊楽院（１）」『平安京発掘調査概報』昭和63年度　京都市文化観光局・（財）京都市埋蔵文化財研究所　1989年

注８　参考文献６

注9　参考文献7

注10　参考文献9

《参考文献》

1　角田文衛「平安京宮殿跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報（1964）』京都府教育委員会　1964年

2　平尾政幸「平安宮中務省跡」『平安京跡発掘調査概要(京都市埋蔵文化財研究所概要集　1978)』京都市文化観光局・(財) 京都市埋蔵文化財研究所　1979年

3　本　弥八郎「平安宮陰陽寮跡」『平安京跡発掘調査概要（京都市埋蔵文化財研究所概要集　1978)』京都市文化観光局・(財) 京都市埋蔵文化財研究所　1979年

4　平田　泰「平安宮中務省跡」『平安京跡発掘調査概要　文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要』1979年度　京都市文化観光局・(財) 京都市埋蔵文化財研究所　1980年

5　辻　裕司「平安宮中務省跡」『平安京跡発掘調査報告』昭和55年度　京都市埋蔵文化財調査センター・(財) 京都市埋蔵文化財研究所　1981年

6　吉川義彦「中務省跡」『平安京跡発掘調査概報』昭和57年度　京都市文化観光局・(財) 京都市埋蔵文化財研究所　1983年

7　前田義明「平安宮中務省」『平安京跡発掘調査概報』昭和61年度　京都市文化観光局・(財) 京都市埋蔵文化財研究所　1987年

8　網　伸也「平安宮中務省（1）」『平安京跡発掘調査概報』平成元年度　京都市文化観光局・(財) 京都市埋蔵文化財研究所　1990年

9　辻　裕司「平安宮中務省（2）」『平安京跡発掘調査概報』平成元年度　京都市文化観光局・(財) 京都市埋蔵文化財研究所　1990年

10　網　伸也「平安宮中務省」『平安京跡発掘調査概報』平成2年度　京都市文化観光局・(財) 京都市埋蔵文化財研究所　1991年

11　前田義明「平安宮中務省（1）」『平安京跡発掘調査概報』平成3年度　京都市文化観光局・(財) 京都市埋蔵文化財研究所　1992年

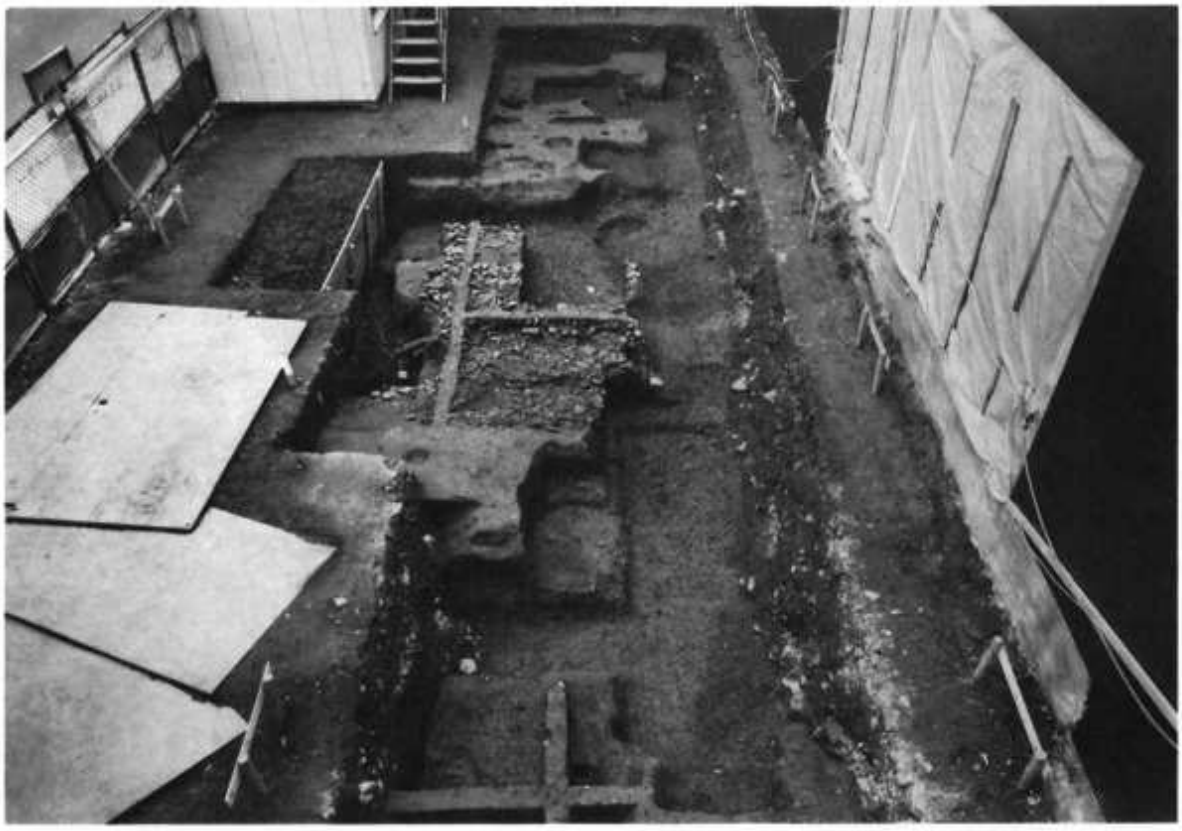
12　吉村正親「平安宮中務省（2）」『平安京跡発掘調査概報』平成3年度　京都市文化観光局・(財) 京都市埋蔵文化財研究所　1992年

13　鈴木久男「平安宮中務省（3）」『平安京跡発掘調査概報』平成3年度　京都市文化観光局・(財) 京都市埋蔵文化財研究所　1992年

14　木下保明・上村和直・長宗繁一「平安宮中務省」『平安京跡発掘調査概報』平成4年度　京都市文化観光局・(財) 京都市埋蔵文化財研究所　1993年

図　　版

1　近世以降遺構面全景（北から）



2　SD46上層瓦検出状況（北から）

1　SD46上層瓦検出状況細部（北西から）

2　SD46下層土器群検出状況（北から）

平安時代遺構面全景（北から）

1

2

3

4

5

11

12

19

6

7

8

9

10

15

16

18

土器

20

26

21

28

30

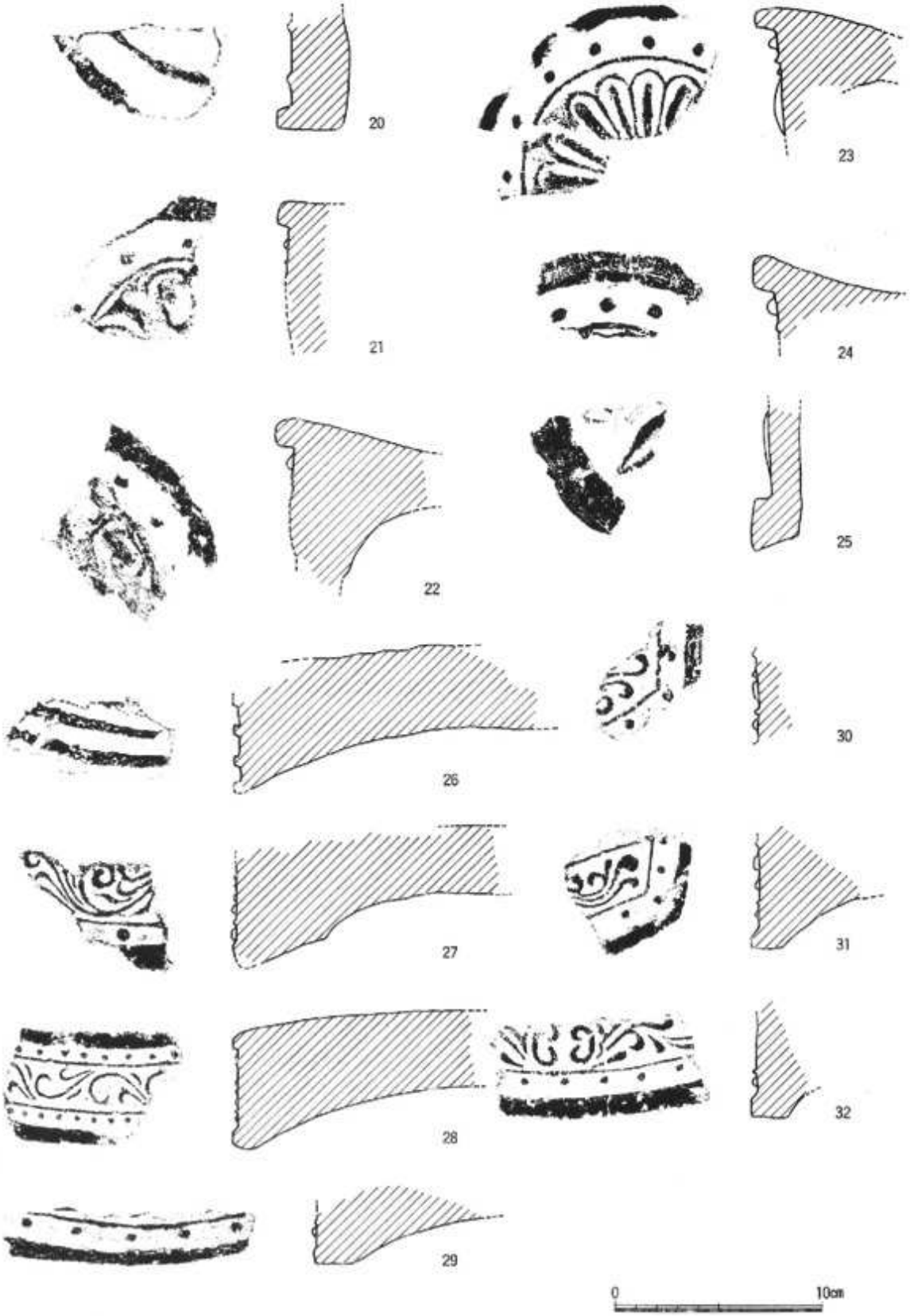
23

31

27

32

軒丸瓦・軒平瓦



軒丸瓦・軒平瓦拓影・実測図

平安京跡発掘調査概報

平成５年度

発行日　平成６年３月31日

発　行　京都市文化観光局

住　所　京都市左京区岡崎最勝寺町13京都会館内

編　集　(財)京都市埋蔵文化財研究所

住　所　京都市上京区今出川大宮東入元伊佐町265-1

TEL (075) 415-0521

印　刷　真　陽　社